

2. グローバル人材養成で注目される国際教養大の挑戦

－「大学の国際化」を考える糸口として－

吉崎 誠（関西外国語大学事務局次長）

はじめに

ただいまご紹介いただきました吉崎と申します。本日は短い時間ですが、グローバル人材養成にかかる事例などを説明させていただいて、皆さんと意見交換ができればと思っておりますので、今から1時間半くらいお付き合いのほうよろしくお願いたします。

本日は、「大学の国際化あるいはグローバル化」は大学マネジメントにおいて、どのような意味をもつのかということをご皆さんと考えてみようということで、議事次第では「大学の国際化とグローバル人材の養成について考えてみよう」というテーマを設定させていただきました。どのような切り口でお話ししようかといろいろ考えましたが、小生のこれまでの職歴から得られた知見を踏まえつつ、話を進めさせていただきたいと思っております。

まず、小生の職歴を紹介しますと、文部省の学術国際局で約9年仕事をしておりました。前半は、研究助成・産学連携に係る業務を担当し、後半は、研究者の国際交流支援、国際共同研究などを担当しておりました。訳あって文部省を辞め、立命館大学で勤めることとなりました。

立命館大学では、教育研究システムの担当課長として約4年間おりました。最後のところで、今別府にある立命館アジア太平洋大学の創設に際して、海外からの学生募集を少しでもお手伝いいたしました。私はインドを担当し、APUに優秀な学生を送っていただくため、現地の高校を訪問したりいたしました。その後、南山大学に転職しました。

そこでは、研究助成、法科大学院の設置をはじめとする大学院改革の業務や学生支援を担当しました。大学院改組後は、瀬戸キャンパスで、教務、学生支援、国際交流とキャリア支援など学生業務を一手に行う第二課の課長をしました。

その後、秋田にあります開学2年目を迎えた国際教養大学に転職し、約6年間おりました。そこでは、企画業務のほか、専門職大学院の設置、学生支援業務などを担当しました。ちょうど1年半前に、現職である大阪の関西外国語大学の事務局次長として転職し、今また設置等の企画関係の業務を中心に仕事をしております。

国際教養大学という切り口/糸口で

本日は、グローバル人材養成、大学の国際化について、これまで業務経験、とりわけこれまで一番長く担当しておりました国際教養大学での経験を踏まえつつ、話を展開していきたいと思っております。

現在、国際化、グローバル人材ということがもてはやされておりますけれども、「大学の国際化」「グローバル人材の養成」ということをよく耳にします。それらは大学にとって何を意味するのか？ 国際教養大学での取組を切り口/糸口として、大学の国際化やグローバル人材を育成するにあたって大学は何をすべきであるのか、そういったことを考えてみたいと思っております。

さっそくスライドのほうに移ります。まず前半部分では国際教養大学での取組について、教学システム、留学システム、キャリア支援の3点くらいを切り口に大学の国際化やグローバル化というものを織り交ぜながら事例紹介をさせていただきます。

人材育成、企業が注目の大学!!

「人材育成の取り組みで注目する大学」

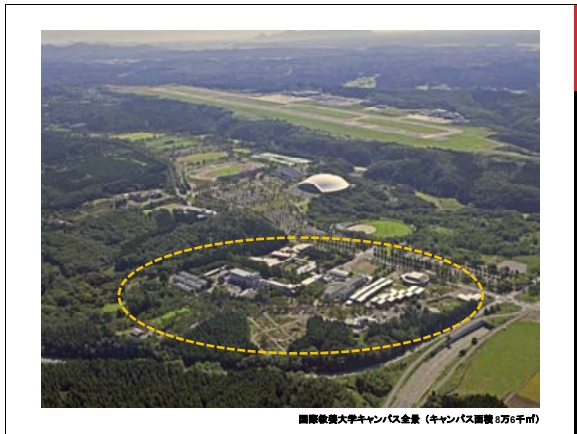
| （回答企業数） | | |
|---------|-------------|----|
| 1 | 国際教養大学 | 35 |
| 2 | 東京大学 | 13 |
| 3 | 立命館アジア太平洋大学 | 10 |
| 4 | 早稲田大学 | 9 |
| 5 | 慶應義塾大学 | 7 |
| 6 | 立命館大学 | 5 |
| 7 | 大阪大学 | 3 |
| 7 | 京都大学 | 3 |
| 7 | 一橋大学 | 3 |

【日本経済新聞 2012年7月16日付け朝刊より作成】

去年の7月、日経新聞の「人材育成、企業が注目の大学」ということで、ちょうど一面にデカデカと載っていたと思っております。国際教養大学がトップ、それから東京大学、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学、慶應大学、立命館大学、大阪大学、京都大学、一橋大学と続いて、人材育成の取り組みで注目する大学、社長が選んだランキングが載っておりました。2004年にできてまだ10年もたっていないところがなぜ企業から注目されるのか。なぜ、国際教養大学が第一位なのか、その要因や実情を見てみたいと思っております。

国際教養大学の立地

国際教養大学は秋田の市街から 15～16 キロメートル内陸に入ったところにあります。車では 20 分から 30 分くらいかかります。ちょうど上のほうに見えるのが秋田空港で、真ん中辺りに県立公園のスポーツ施設がありまして、この図面のいちばん下の辺りが国際教養大学のキャンパスで、面積が 8 万 6000 平米あります。森に囲まれて、クマが出没したり、ニホンカモシカが見受けられたりする、たいへん自然豊かなキャンパスです。



見てのとおり、周りは森ばかりで何もないのです。コンビニもなければ、本当にここで生活するというので初めて来た人は、たぶんカルチャーショックを受けるのではないかと思いますけれども、このような環境だからこそ逆に勉強に集中できるのかもしれない。

国際教養大学の設立の経緯

秋田の地に、どうしてこの大学が設立されたかという経緯を見たいと思います。1980 年代後半は、アメリカの大学が日本校を設置するため、日本各地に進出してきた時代です。秋田もご他聞にもれず、ミネソタ州立大学機構が今の国際教養大学の地に秋田校を開校いたしました。


最初のうちは良かったようです。順調に学生を集めたようですが、数年経つと、英語で授業をやりまますので、英語についていけない。あるいは、授業料はアメリカ並みに取られますし、成績もアメリカと同じ基準で厳格に付けられる。これらにより、日本の大学とのギャップも大きく学生が馴染めない部分もあったかもしれません。また、一条校ではないので、日本の大卒資格が得られないといったこともありまして、この大学もよその日

本校と同様、急カーブを描くように学生がどんどん減っていった、開学 10 年ちょっとくらいで閉校に追いやられました。2003 年 3 月に最後の学生を送り出して閉校しました。

閉校後、秋田県ではこの遺産を活かし、国際系の大学を作りたいということもあり、委員会を立ち上げ、いろいろ議論をしていたようです。新しい大学づくりについては、少子化、18 歳人口の減少期を迎えるにあたって、秋田の地に国際系の大学を作ってちゃんと学生が集まるのかどうか。ミネソタ州立大学秋田校の例もあるので、県のほうではお金は出したはいいけれども学生が集まらないのではないかという危惧や、いろいろな条件から県議会では、国際系大学設置構想は否決されております。

そこで、この遺産をなんとか育てていきたいということで、県知事、いま参議院議員をやっております寺田典城県知事が自身の政治生命をかけて、選挙公約で国際系の大学を作るということで知事選に打ってでて当選されました。国際系の大学を作ろうという芽が復活しまして、2002 年に準備委員会ができて、この時に中嶋嶺雄先生が委員長として呼ばれております。それ以来、先日亡くなられましたけれども、十数年にわたりまして国際教養大学の立ち上げからずっと面倒をみてこられたことは周知のことです。

AIU 設立経緯

- ミネソタ州立大学機構秋田校閉校 (2003年3月)
- 「国際系大学検討委員会」設置 (2000年4月)
-  県議会における攻防
- 「国際系大学創設準備委員会」設置 (2002年4月)
- 大学設置申請書提出 (2003年4月)
- 設置認可【文部科学省】(2003年11月)
- 法人設立認可【文部科学省・総務省】(2004年4月)
- 国際教養大学開学 (2004年4月)

この大学が誕生するまでには紆余曲折があったようですが、2003 年 4 月に大学設置申請をしまして、2003 年 11 月に文部科学省から設置認可、これは第 1 号の公立大学法人ということで総務省からも法人の設立認可を得て、2004 年 4 月に国際教養大学は開学する運びとなりました。

国際教養大学のプロフィール

国際教養大学のプロフィールですが、設立は2004年4月です。「国際教養学部」の一学部に、ビジネス関係を中心に学ぶ「グローバル・ビジネス課程」と、地域研究を中心に学ぶ「グローバル・スタディーズ課程」の2課程を有しています。開設当初は100名でスタートしております。その後、徐々に定員を増やし、現在は175名となっております。在学数も834名ということで、男女比が3対7くらいの女性が多い大学です。

AIU基礎データ

- 設立 2004年4月
- 学部数 1学部（国際教養学部）
- 課程数 2課程（グローバル・ビジネス、グローバル・スタディーズ）
- 定員 175人
- 学生数 834人（男性33%、女性67%）

国際教養大学のミッションは、「国際教養 (International Liberal Arts)」という新しい教学理念を掲げまして、「英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と豊かな教養、グローバルな専門知識を身に付けた実践力ある人材を養成する」ことを大学のミッションとしております。

AIUのミッション

「国際教養」(International Liberal Arts)という新しい教学理念を掲げ、英語をはじめとする外国語の卓越したコミュニケーション能力と豊かな教養、グローバルな専門知識を身に付けた実践力ある人材を養成し、国際社会と地域社会に貢献することを使命としている。

これを実現するためにいろいろ仕掛けがあります。授業はすべて英語で行う。1年間の海外留学の義務付け。キャンパスでの留学生・外国人と日本人学生の共存・共生。少人数教育で学生中心の施設。徹底した就職支援。ユニークな入学制度。など、この大学の特徴として挙げられようかと思えます。

AIUの6つの挑戦

- 授業はすべて英語！
- 年間の海外留学が義務！
- キャンパスは異文化空間！
- 少人数教育と学生中心の施設！
- 徹底した就職支援！
- ユニークな入学制度！

国際教養大学の名称の由来

具体事例の説明に入る前に大学名の由来について触れたいと思います。

なぜこのような大学の名前を付けたのかと、初めて就職した時に、中嶋学長に聞いたことがあるのですが、当初は東アジア大学、秋田国際大学などの平凡な名前だったそうです。ある時に、外国で東アジア大学という名前を学識者に聞いた時、東アジアといった時に中国を想像すると言うのです。

これではまずいということで、ずっといろいろ考えられていて、先ほどのミッションである国際教養、たぶん中嶋先生が作った言葉ではないかと思いますが、その名前そのものを大学名にしたらいいのではないかということになったそうです。当時中嶋先生はバイオリンを弾いていらっやって、スズキメソードの大会がヨーロッパであった時、父兄に聞いて、このような名前だけと、東アジアとか候補をいろいろあげて聞かれました。どれもあまりピンとこないようですが、教学理念をそのまま使ったらどうですかと、どなたかにヒントをいただいたようです。

それで国際教養大学という名前にしようと学長が考えたようです。最終的には「国際教養大学」という名前になったようです。ただし英語名称には Akita International University ということで、国際教養という言葉は一切出てきませんけども、日本語で国際教養大学という名前ができた由縁です。

ほぼ同じ時期に、早稲田大学に国際教養学部ができております。その後いろいろな大学で学部、もしくは学科に国際教養という名前を冠した学部、学科ができております。

教育カリキュラム：4年間の「学び」の流れ

まずは、教育カリキュラムについて説明したいと思います。特徴としては徹底した英語環境。グローバル人材を育てるということで、まず英語に着目しております。中嶋先生が常々おっしゃっていましたが、大綱化以来日本の大学教育から「教養教育」が消えたと。いろいろな意味で、世界で活躍する時には『教養』が必要であるということで、教養教育というものを重視しております。これは未来に通じる教育理念であるとの確信が中嶋学長にはあったようです。

また、徹底的に鍛え上げるためには、少人数教育でやる。海外から留学生を受け入れるためには、セメスターをやらなければならないということで、完全セメスターをひいております。卒業するまでに必ず1年間の海外留学が卒業要件になっておりますので、行かないと卒業できない。授業の内外で常日頃から外国人との交流を図りながら、グローバル人材の育成を行っていることが特徴として挙げられようかと思えます。

この教育プログラムですが、具体的に4年間の流れを可視化しております。まず、入学しますと1年間は英語を学ぶための English for Academic Purposes という4年間大学で「英語で学ぶ」ための基本的なトレーニングをこのコースを中心にやります。三つのレベルに分かれております。まず1のレベルはTOEFLで459点以下、479点以下がEAPの2番目、480点以上の人が入級クラスのエAP3のレベルということで、TOEFLのプレースメントテストを受けていただいて、クラス分けをします。

いくらTOEFLがいきなり550点、570点あってもEAP3のレベルだけは必ずやっていただくとい

うことで、いくら英語が得意な学生でも大学で学んでいくための学術英語を学んでいただくためにこのEAP3は必ず履修することになっております。レベルに応じてEAP1からスタートする学生と、EAP2からスタートする学生と、いきなりEAP3からスタートする学生に分かれます。

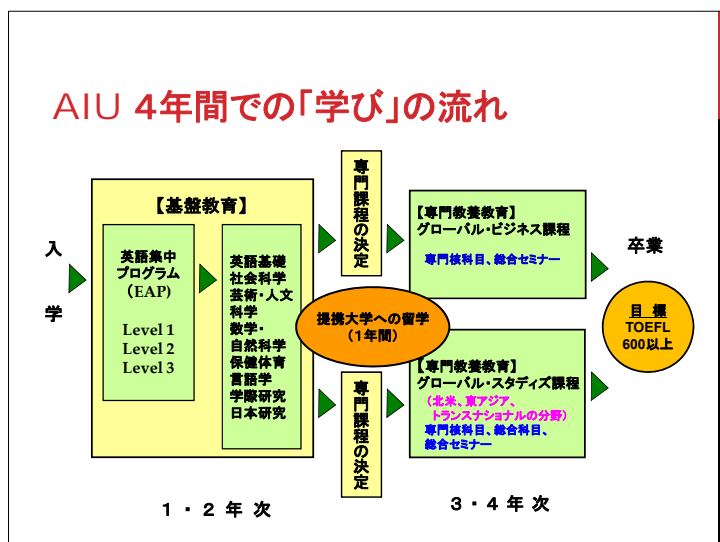
レベル1の人はレベル2,3をクリアしますと、次のステップである基盤教育へ移っていき、これらの科目履修が終わると、専門課程へと進んでいくことになります。専門課程の選択は、通常は留学に行く前くらいに、グローバル・ビジネスかグローバル・スタディにするか決めることとなります。学長いわく”later specialization”と。

はじめからタコつぼのように何々学部、何々学科という狭い意味の学問分野には閉じ込めないで、教養で英語や社会科学や人文科学、自然科学などいろいろな学修経験を踏まえて、自分の将来を3年生くらいで決めたらいいのではないかという形で、入試もはじめから何々課程という形では募集せず、国際教養学部として一本で行っています。

卒業の時はTOEFL600点くらいを目指しております。これは別に必修要件ではありませんので、600点にならないと卒業できないという話ではありませんが、4年間の学修課程の前半部分では、進級要件でTOEFLを一定以上取らないと次のステップに行けないシステムになっております。

具体的には、1年の英語を学ぶためのプログラムから基盤教育をするためにはTOEFLが500点以上クリアしなければ、ずっとEAPのクラスを受け続けなければいけない。基盤教育が終わって専門課程に入る時も、EAPを終了するという事はTOEFL500点以上で、教養教育の部分で30単位以上取っていること。留学には、TOEFL550点以上取らないと行かせないことになっております。

だいたい550点くらい取らないとアメリカの大学の授業についていけないということもありますので、必ず550点を取らないと、そこで足踏みをする形になっております。それを救済するための学習支援やサポートシステムはありますが、要は1点もまけないことになっております。卒業要件としては、1年間の留学を修了して124単位以上、なおかつGPAで2.0を取らないと卒業できないという、卒業までに高いハードルが学生には課せられております。



コースナンバリングとシラバス

| コース・ナンバリング | |
|----------------------------------|---|
| 科目コード・対象 | 特 徴 |
| 100~199 (フレッシュマン、 ソフォモア向け) | アカデミック・スキルの上達、学習習慣の形成、基本的な学術用語の習得に焦点を当てた科目。広範な視野を得て、後の自分の関心分野をより深く学ぶ。 |
| 200~299 (ソフォモア、 ジュニア向け) | 一般的な英語での授業を特別な配慮を加えずとも受講できる段階、自律した学習において応用する段階へとシフトする。内容もより抽象的なものを含み、分析力を要するもの。 |
| 300~399 (ジュニア、シニア向け) | 高度な専門的能力の醸成に焦点を置く。より高いレベルでの抽象化や学際的なアプローチにより視野を広める。 |
| 400~499 (シニア向け) | 300番台の科目で得た専門知識と能力を活用することに焦点が置かれる。専門性をより深めていくことができるよう準備教育も目標とする。 |

【学生便覧 2009-2010】より抜粋

大学教育の国際化の時に何が重要かという時のちょっとしたヒントです。「コースナンバリング」いう、アメリカの大学にはあるのですが、科目に100番台、200番台、300番台、400番台と番号を付けて、そのレベルを表すようにしたものです。例えば、経済学何とかと言われても、これが入門編なのか専門科目なのか該当する年次を見ればわかるのですが、このような形でナンバリング等々すれば、後で留学した時の単位互換や国際通用性の時でも役に立つということがあります。

| シラバス | |
|--|--|
| <p>ECN100 INTRODUCTION: WORLD OF BUSINESS & ECONOMICS (3 credits) Michael LACKERTON, MBA, PhD Email: mlackert@uab.edu Office: 800G A, 4-112 Office hours: just drop in, or by appointment</p> <p>DESCRIPTION: This is AUI's most basic course in business and economics. It is intended for both students planning to major in Global Business or Global Studies. The course begins with an introduction to economics. During this phase of our study we will all move to the imaginary Treasure Island and build an economic system. The system will determine what products will be produced, how they will be produced, how many will be produced, and how the products and wealth generated will be distributed to our island inhabitants. During the next phase of our study we will focus on business questions: "What is a company? What is their purpose? How do we measure their performance? How are they financed? How are they structured? What is risk and how is it measured? Who are the great economists: from the past and what concepts do we have their contribution to our understanding of economics? During the course students will develop habits that will serve them throughout their lifetime, including the capacity to use the world we live in through critical, independent, and global eyes. Students will be expected to follow on a daily basis, through newspapers, journals, and electronic media, current economic, data and major economic and business events, and will be regularly called upon in the classroom to summarize these events and data and related them to the concepts we are learning in this course.</p> <p>COURSE OBJECTIVES: Students will (1) acquire basic understanding of a wide range of concepts from the world of business and economics; (2) develop basic study habits, including regular reading of newspapers, journals, and electronic media related to business and economics; (3) be able to discuss major events and events from the world of business and economics, particularly in the context of Japan and Singapore companies; and (4) learn how to succinctly summarize what they are learning in weekly writing assignments.</p> <p>STUDY MATERIALS: -No Textbook</p> <p>General Reading: Students will follow regularly articles that appear in the Japanese Nikkei Shimbun newspaper, English, Nikkei Weekly newspaper, and various journals such as the Harvard Business Review, BusinessWeek, and Fortune. Wharton business school, INSEAD business school, and McKinsey & Company contributions to the Business Knowledge section at</p> <p>Website Reading: Students are required to read daily the online version of the Nikkei Shimbun, which may be accessed at www.nikkei.com or by using computer. Students will also be expected to regularly access the "CEO Express" website at http://www.ceoexpress.com/default.asp.</p> | |

| シラバス (つづき) | |
|---|--|
| <p>ASSESSMENT OF STUDENT PERFORMANCE: 10% class participation 10% team presentations 10% weekly assignments (News Brief Analysis/other assignments) 10% surprise quizzes (probably 3, but maybe more) 10% final exam</p> <p>ACADEMIC PREPARATION: Lots of energy and enthusiasm.</p> <p>CONNECTIVITY IN A KNOWLEDGE FOREST: When you are learning a subject, my advice is to approach it as a "forest of knowledge." Inside the forest are many trees, branches, and leaves. Always look for and try to understand the connectivity of your subject matter—the connections between the forest, trees, branches, and leaves.</p> <p>For example, one of the courses I teach is ECN304 International Business. That course is about the "forest of international business knowledge." Inside the knowledge forest are many knowledge trees: theories of foreign exchange (国際貿易論), theories of international trade (国際貿易論), theories of foreign direct investment (海外直接投資論), and theories of international strategy (国際競争戦略論). Each knowledge tree has many knowledge branches: interest rate parity theorem (IRPT), purchasing power parity (PPP), etc. Each knowledge branch has many knowledge leaves: law of one price, theories of interest rate determination, etc.</p> <p>When you are studying difficult material, it helps to frame your learning using the analogy of a forest, composed of many trees, branches, and leaves. When studying detailed matters (the leaves), always connect leaves to branches, branches to trees, and trees to the forest. By connecting received knowledge, you will not lose sight of the "big picture" will understand the subject matter more deeply, and will be less apt to forget what you are learning. One of the key philosophies of liberal arts education is that knowledge should be acquired as a connected way to create intersections among a broad range of subjects. This distinguishes liberal arts education from other educational approaches that are overly concerned about relevance to specific careers.</p> <p>My advice to students is to view education from the perspective of interconnectivity. Connect your learning. Look for intersections of knowledge.</p> | |

これが具体的なシラバスです。上に ECN100 番、これは先ほどの入門編です。ECN は略語で、経済学の分野の科目で、単位数、担当者の教員名、メールアドレス、オフィスの部屋番号、オフィスアワー等々。コースの目的、概要、どういった教材を使うのか、などの情報が記載されています。

これに続いて、どのようにして成績を付けるか、評価基準の項目と比率が列挙されています。具体には、Class Participation が 10%、Team Presentation が 10%、毎週の宿題が 15%、Quizzes は小テストがセメスターの中で 3 回、もしくはそれ以上、それが 30%、Final で 35% といった比重で、期末試験や中間テストだけではなく日頃から Quiz などをやりながら、学生の達成度を見ながら、それも評価の中に入れていくという形になっております。その後は科目の概要がずっと書かれており、そういったことで統一したシラバスができております。

これは私がちょうどいた時ですが、最初シラバスはバラバラだったのですが、統一したシラバスを作ったほうが学生のためにもなるし、教員間の評価でも、どの先生が何をやっているかということがよくわかるだろうということで、泊り込みの FD Retreat で喧々諤々議論を尽くして、新たなシラバスのフォーマットを作りあげておりました。私もその輪に入っておりましたが、そういった形でできておりますので、先生方はある程度 FD 等々で喧々諤々やっていますので、いったん合意になればあとは先生方が自分の科目に落とし込んでいって、それを学科長が自分の担当するところをちゃんとチェックするというようなシステムになっております。

1年間の海外留学の義務化について

ここまでの教育システムの話で、いったん終わらせていただいて、次に二つ目の特色である留学についてお話しさせていただきます。

国際教養大学では1年間の留学は必修です。留学を義務付けたのは、学生にとって客観的に日本について考えることは、日本にとどまってはできない貴重な体験だろうと。何よりもここが大切なところですが、異国で誰のサポートもないままに海外の大学で授業を受けるということは、学生自身の魂を揺さぶられる挑戦であり、冒険であると。これは中嶋学長の言葉です。

留学とは、語学だけではなくて、異文化体験、

もしくは困った時も日本語をしゃべる人はいませ
んのので自分でアピールして、担当者と交渉する
Tough Negotiation といった力も自然に身に付く。
そういった経験で1年間でも帰ってくれば、少し
はたくましい国際社会で活躍できるスキルの一端
はこの辺りで培われるのではないかと考えており
ます。



いま提携校数は146大学ありまして、受け入れ
学生が114人、AIUから海外のほうに出ているの
が31カ国地域118人。ほぼ均衡は取れております。

何を意味するかというと、授業料相互免除で協
定校を募っております。今AIUは約70万円の授
業料をとっております。アメリカの授業料は概し
て高額です。リベラルアーツ・カレッジでは200
万円くらいの授業料を取る大学へAIUの学生を1
人派遣すると70万で、向こうが210万というこ
とで、1対3の比率になりますね。この方式で行
いますと、授業料のみの相殺になりますので、当
方から1名の学生を送り出すと先方から3名の学
生を受け入れて授業料で応分になります。そうし
ますと、先方から多くの学生を受け入れるに堪え
るだけの中身が必要となります。ただ、授業料に
よるバランスだけでは破たんしますので、セメス
ターごとの受け入れバランスによることも考える
必要があらうかと思えます。いずれにしても留学
システムを考えるには、コスト面もありますが、
やはり、国際的通用性のあるプログラムを構築す
ることが必須となります。

留学にはTOEFLで550点以上を取らないと行
かせませんし、ある程度一般的な教養がないと向
こうに行っても、授業になかなかついていきませ
んの、英語さえできればすぐ行かせるかという
話ではありません。基盤教育において、教養教育
といわれる人文科学、社会科学、自然科学とい
った基礎のところの単位をある程度取って、なお
かつTOEFLで一定の英語力がある人を海外に送り

出すというシステムになっております。

AIU留学システム

○ 留学要件

→ GPA 2.5, TOEFL 550点以上

○ 留学先(提携校)

→ 146大学(40か国・地域) 多様な地域、多様
な大学

○ 留学先授業料の相互免除

→ AIUへ授業料を納付するのみ。(渡航費・生
活費は自己負担)

○ 留学先で取得した単位の認定

今、提携校は40カ国146大学に、今もどんど
ん増えております。これは国際交流のスタッフが
日々努力をして、アメリカやヨーロッパなどで開
かれているNAFSA、APAIEなどの国際交流担当者
の国際会議などに、ブースを出して大学の特色な
どを紹介するのみならず、アメリカのNAFSA等々
では、国際交流に係るセッションに参加し、知見
を深めるなど地道な独力をしております。これら
の会合は、大きなホテルの会場を借りて、国際交
流や国際教育を担当するスタッフが一堂に会す、
見本市のようなイメージで見ただければいい
と思いますが、大学の情報交換をしたり、具体的
に提携のやり取りをしたり、日頃コンタクトが取
れない担当者とはFace to Faceで、いま送ってい
る学生どうなっている？などの諸々の情報交換を
しております。

留学に係る費用は、授業料は相互免除になっ
ておりますので、1年間国際教養大学のほうに授業
料を納めていただければ、アメリカなど高い学費
の大学に、AIUの学生は国際教養大学の授業料で
留学できるということになります。ただし、渡航
費や生活費は自己負担になっております。生活費
は日本にいてもかかりますし。ただ宿舎につい
ては、大学外のアパートより大学施設に入居して
いる方が多いと思えます。

留学先で取得した単位は、留学先大学の成績評
価に基づいて国際教養大学の単位として単位互換
で認定して、ちゃんと卒業できる要件に組み入れ
ております。ただし、向こうでドロップアウトや
「不可」を取った科目については、単位認定はい
たしません。AIUでの修了要件は124単位以上必
要となりますので、1年間留学に行くとなるとだ
いたい30単位分は向こうで取っておかないと4
年間で卒業できないこととなります。

例えば、20単位しか取れなかったら残りの10

単位は国際教養大学で 10 単位分の科目を取っていただく。足して 124 単位ということになります。留学先で 30 単位取ろうと、10 単位取ろうと、大学としては何単位取ったということに加え、1 年間向こうでいろいろな経験をしたということも見ております。

1 年間の寮生活

次に、3 番目の特徴である寮生活の話に移ります。先ほどは、どちらかというと正課教育の話をしましたけれども、ここでは正課外教育としての寮生活の話になります。高校卒業し、親元を離れて来たばかりのたばかりの新生入生は、1 年間学生寮の中で共同生活をさせます。その意義は、社会生活への順応や異文化、多文化のメルティングポッドで問題解決力や社会人基礎力を身に付ける。いわば、留学への予備教育の側面もあると考えております。

1 年次寮生活の義務化

正課外教育としての寮生活

1 年次の寮生活体験を通して、

- ① 多文化・異文化のメルティングポッドで問題解決力、社会人基礎力を身に付ける。
- ② 留学への予備教育

学生寮には、「シングル」の部屋はありません。一部屋 2 人。これが対になって、真ん中にバス、トイレと洗面台があり、その共有スペースを居室がサンドイッチにした形が 1 ユニットの部屋として形成されております。4 人で共同生活する形で、その 4 人の中の 1 人は留学生が入るように工夫しております。

日本人は 7 割が女性で、男性が 3 割です。留学生はほぼ半々です。男女比の関係で女性のほうで若干日本人しか集まらない部屋が出てきますので、そこは 1 年間のうち、半分の 1 セメスターは留学生が必ずいるように工夫して、必ず 1 年間の中で半年は留学生と共同生活ができるようにしております。

多文化のいろいろな学生が集まる、日本人学生もほぼ全国 47 都道府県から来ておりますので、日

本の中でもいろいろな文化が違う側面もありますので、そういった学生が集まって共同生活をするということで、そこではいろいろなトラブルが起こって、自分たちで解決せざるを得ません。例えば、自分たちの居室あるいはバス・トイレなどの共有部分の掃除当番の順番を決めるとか、トイレトーパーは誰が買うのかとか、諸々の共同生活、社会人生活を送る上でのことがらを、ここで実習をしているということにもなります。

海外に留学しますと、シングルルームなどありません。よくてもダブル、下手すると 3 人、4 人でルームシェアすることになります。今の高校生は自宅では一人部屋でしょうから、そういう学生がいきなりアメリカなどの異国の地で共同生活をしろといってもなかなか適応できない子どもたちが結構多い。そういう意味では、1 年間キャンパス内で共同生活をすることによって、留学に行った時に少しでも役に立つのではないかということもありまして、1 年間の寮生活を義務付けております。

■ 通過儀礼として必要な共同生活

- ・ 「大人」へのステップを自然に踏んでいく適応力
 - ・ 海外からの留学生や日本各地からの学生との共同生活
- プライベートな時間・空間でも英語コミュニケーションの機会が多いため、生活そのものが生きた異文化交流、語学研修の場。

もう一つは、通過儀礼として、「大人」へのステップへ進むための適応力や海外からの留学生、日本各地からの学生と共同生活することによってプライベートな時間や空間において、コミュニケーションを取る時には英語もしくは留学生も英語ではないところからも来ますので、そこの母国語など、コミュニケーションを取る機会が多くなりますので、そういった生活そのものが生きた異文化交流や語学研修の場としてとらえることもできようかと思えます。

私が学生課長をしていた時に、学生がいろいろなトラブルを起こし、ある程度我々も介入はしました。けれども、いきなり介入しても学生のためにならないということで自治会を組織させ、学生たちに自分たちでやっごらんというように最初は仕掛けたのですが、今は自分たちで進んで自治の

精神が少しずつ芽吹いているようです。

日頃、生活環境のリズムの違いから多くトラブルが発生はしますけれども、いきなり我々スタッフが入るのではなく、学生同士でまず話し合っ、寮の委員会がありますので、そういったところで考えてごらんという形で、学生にトラブルシューティングも含めて勉強させております。新入生も1年いろいろな経験を経て、いろいろな面で鍛えられますので、ある程度人間力が付いてたくましく感じることもあります。

下の左の写真がこまち寮で、ミネソタ州立大学秋田校の時にあった鉄筋の建物をそのまま使っております。真ん中のグローバル・ヴィレッジの写真の右手が学生寮です。国際教養大学ができる前のミネソタ州立大学秋田校の時から使っています。左手の木で造っている低層のほうは新たに国際教養大学ができた後に造った学生アパートです。

AIU居住環境



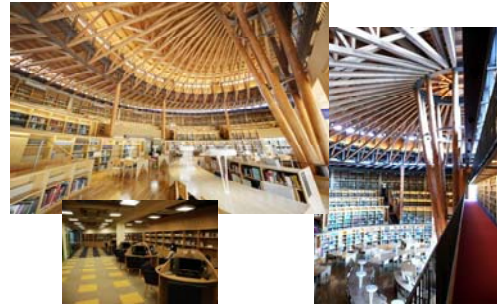
1年間の入寮生活から出ますと、地図で見ましたように周りに何もありません。アパートもありませんので、学生の学修への専念への配慮、経済的状況などを考慮し、キャンパスの中にシングルもしくはダブルで、アパート形式で宿舎を作っております。今、キャンパス居住率が80%くらいあり、ほとんどキャンパスの中で生活しております。今年、もう一つのエリアで新しい学生アパートができるかと聞いております。

学生支援： 図書館

次に学生支援の話に移ります。まずは図書館。これは秋田杉で造った開架式の図書館です。自慢は24時間365日開いている図書館ということで、常々中嶋学長は「コンビニが24時間365日開いているのに、なぜ図書館ができないのだ」と言っております。学生寮で共同生活しておりますと、

生活のリズムが違って来る。早く寝る人、朝型、夜型などいろいろあります。もし、図書館が24時間開いていますと、ルームメイトの生活のリズムの差もあまりプレッシャーに感じないまま勉強に集中できるということもあります。また、予習・復習もしっかり課し、勉強させますので、24時間365日間、休まず図書館は開いております。

不眠不休の図書館 (24時間・365日オープン)



留学生の存在意義

本学には、留学生がたくさんいますので、そういった学生を秋田の地域に送り出しております。田植えや地域のお祭りの行事への参加、幼稚園、小・中・高校を訪問して学生や幼稚園児をはじめ地元の方々と交流させております。

最近では秋祭りでお神輿を担ぐ人が高齢化になって担げないので留学生にお願いしますという要望も来ておりますし、クリスマスにはサンタクロースに扮してプレゼントを配ってくださいという幼稚園からの要望等々が来ております。AIUの人材を活用し、このような活動を通して、地元秋田への地域貢献にもなりますし、留学生にとっては日本のいろいろな体験をすることにより、充実した留学生活になっています。

留学生の存在は、国際教養大学にとってどのようなメリットがあるのか。海外の一流大学から交換留学生で来ておりますので、授業参加を通して、授業運営への貢献は大だと思っております。日本人は黙って、ただ先生が一方向的にしゃべっているイメージがありますけれども、この大学はなるべく先生方が学生に意見を言わせようとやるのですが、それにも増して留学生のほうから率先して授業運営に加わったり、貢献したり、相当厳しい授業評価が出てきますので、教員および日本人学生への外圧となっていると思っております。先生方一教えるほうも

戦々恐々として教授法といったところをチェックしているところがよくありました。

それから地域との交流の担い手。日本から来ている日本人学生も担い手ではありますが、秋田県は東京と違って外国人を見る機会がめったにありませんので、そういった学生が地域の幼稚園や小中学校のほうに行き、交流をしていただくということで、最近では地方公共団体と協定を結んで、学生の交流や地域体験といった取り組みも出て、少しずつ秋田にある国際教養大学というものが認識されているのかなと思っています。

学生支援：徹底した就職支援

次に就職の話にいきます。秋田は東京と違いま

学生による地域交流・国際交流



して飛行機で1時間。飛行機で1時間といってもフライト片道1万5000~6000円、2万円弱かかりますし、新幹線では4時間かかります。深夜バスでは6時間から8時間かかります。なかなか就職活動で東京などに一回行きますと、それだけで相当お金がかかってきます。一つ考えたのは、就職セミナーと称して全国の企業の人事担当者の方々に1回キャンパスに来ていただいて、国際教養大学がどういうものか見ていただきながら、そこで会社説明会を設定していただく。年に何回かやっております。

最近では、いろいろな企業から注目していただくこともあって、秋田まで来ていただいております。ある企業によっては、社長さん自ら乗り込んで面接をして、内定を出してくれる企業もあります。必ずしも上場の一般の一流企業だけではありません。地方で活躍している中小規模の企業で海外進出している企業の社長自ら乗り込み、国際教養大学のたくましい学生をぜひ欲しいということもありました。

企業がAIU学生に期待する点

初参加企業 ⇒ ①留学経験 ②海外志向 ③語学力

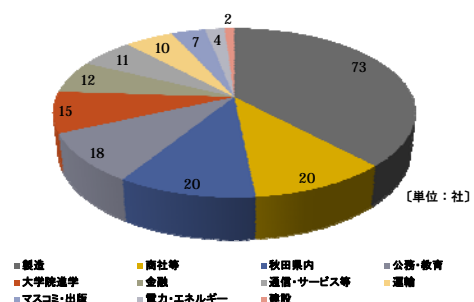
2回以上参加企業 ⇒ ①素直さ ②海外志向 ③誠実さ

| 全体 | 1回 | 2回 | 3回 |
|-------|------|------|------|
| 期待する点 | 留学経験 | 海外志向 | 語学力 |
| メーカー | 留学経験 | 誠実さ | 海外志向 |
| 金融 | 留学経験 | 語学力 | 海外志向 |
| 流通 | 海外志向 | 誠実さ | 語学力 |
| 建設 | 海外志向 | 誠実さ | 語学力 |

【国際教養大学キャリア開発センターより入手】

企業が国際教養大学の学生に期待する点ということで、初めてこの就職セミナー等々に参加した企業は、留学体験や海外志向、語学力というものに魅力を感じて国際教養大学の学生に目を付けているようですけれども、何回も参加しておられる企業は、その辺はだいぶ薄くなって素直さや誠実さという、語学力や留学体験以外のほうも注目するという傾向にあります。メーカーや金融や海運、商社に分けて順位を見てみると、それぞれAIUの学生に期待する点が異なるという結果になって、必ずしも一致はしておりません。業種によってバラバラだと思います。

卒業生の主な就職先・進学先(過去5年分)



【国際教養大学キャリア開発センターより入手】

過去5年のデータですが、卒業生がどういったところに就職しているかというと、やはり製造業がいちばん多いです。それから商社、秋田県内の官公庁も企業も含めて秋田県内、それから公務員や教育関係、大学院へ進学する人も、リベラルアーツということもあって、学長もぜひ大学院のほうでもっと専門性を高めてほしいということも相当宣伝しておりましたので、大学院へ行く学生も若干、15大学くらいに行っております。あとは次のような分布になっております。

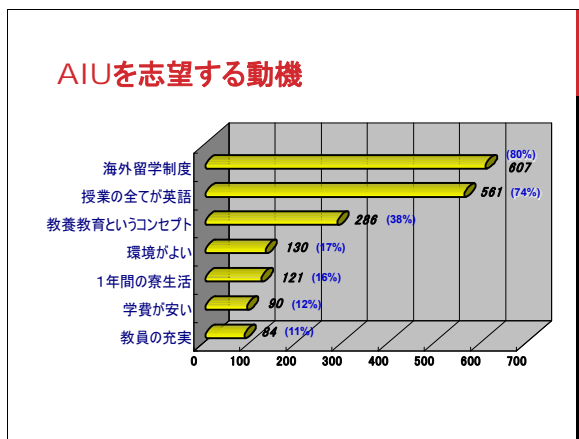
就職者数上位の企業を見ますと、延べ人数では、国際教養大学の大学院に行く人が最も多く、就職

では、三菱マテリアル、三菱電機、三井住友銀行、旭化成などへの就職者が多く、あとは製造、運輸、商社・卸・小売、金融、マスコミ・出版、通信・サービス、建設などの様々な分野の企業等に就職しております。

開学して、卒業生が出る最初の年、企業説明会に誘っても4社くらいしか来られませんでした。それが現在、最新のデータで136社くらいが秋田の地にわざわざ足を運んでいただいて、いろいろやっていただいています。徐々にではありますけれども、わざわざ秋田に向向いて行って優秀な学生を取ろうという企業も増えてきております。

入学志望者のプロフィール

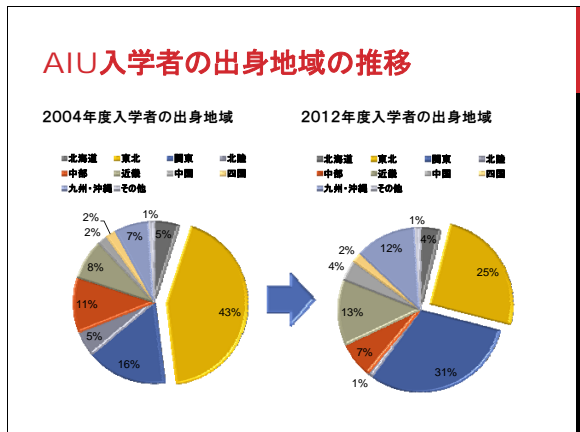
就職から今度は入口のほうに話を変えてみたいと思います。国際教養大学を志望する動機を、平成20年度のアンケートですが、海外留学というものが魅力、授業がすべて英語ということが重複回答ですが8割近くおります。教養教育というコンセプトに憧れて、が4割くらい。環境がいい、1年間の学生寮、学費が安いといった順になっております。



やはりすべて授業を英語でやっている、1年間海外留学に行けるというコンセプトで、AIUを志望する学生が多いということになっております。

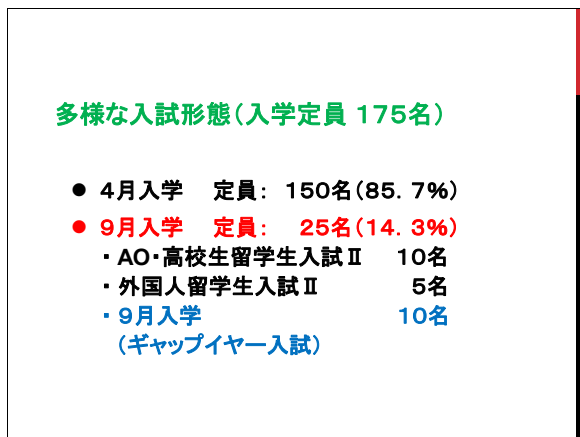
出身県では、最初の年は地元の東北圏が4割強おりました。去年の入試のデータでは東北は4分の1に比率として減っております。その代わりに関東圏、東京エリアや近畿圏も13%、九州12%、わりと大都市圏で大阪、東京、福岡の辺りから学生が集まるようになってきております。いま現在、47都道府県のうち、在学学生がいないのは島根県だけがゼロです。あとは全部46都道府県から学生が来ております。かつては島根県から来た学生もい

るのですが、直近のところで見ますと島根県だけがおりません。



多様な入試形態

入試はどんなことをやっているのか。一つは9月入学の本格的な導入をする。公立大学法人でありながら、他の国公立大学と独立した入試日程を組んでおります。入学前のボランティア活動を評価する、今流行りのギャップイヤー入試も早くから導入して、多様な人材の発掘を目指しております。



定員175名のうち、4月入学で入る学生は150名で、約86%が4月入学になります。9月入学の25名は、AO・高校生留學生入試10名—高校生留學生入試というのは、1年以上海外の高校で勉強していたとか海外の高校を卒業したといった日本人学生のための入試です、外国人留學生入試5名—一字のごとく日本人学生以外で海外の外国人で海外の高校を卒業してAIUに入学を希望する学生、それからギャップイヤー入試10名の定員を設けております。

ギャップイヤーを開設した当初は、応募者数も

11名しかいませんでしたが、名前が知れ渡って今では10名の定員について77名くらいの応募が来ておりますので、毎年ギャップイヤーの応募者、志願者が増えてきております。

そのギャップイヤーは何をやっているか。まず2008年度からこの入試の採用をしておりますけれども、2012年から選考方法を変えております。最初の2011年まではセンター試験5科目プラス面接でした。それを2012年度から志願理由とギャップイヤーの計画書に基づいて面接を行う。それプラス英語の小論文を課しております。以前もギャップイヤーの活動計画書や志望理由書は出していたのですが、面接の時に聞く程度でしたので、そういったことにも比重をある程度置くようになってきております。

ギャップイヤーの目的は、アカデミック・イヤーのグローバル・スタンダードに対応するとともに、高校生時代の勉強からすぐに大学で学習するのではなく、ある程度猶予期間を設けてさまざまな活動を通じて国際教養大学で学ぶグローバルな知識や思考能力をより機動的、具体的に身に付けていただくための制度で、このギャップイヤーをやっております。

日程は、11月末に入試をしまして合格発表をいたします。その間に秋田に集まって、具体的に活動計画を合格者に発表してもらい、4月から8月の間に活動していただく。8月の終わりには入寮して9月から入学式に望んでいただく形で、4月から8月の間が具体的なギャップイヤーの活動時期になっております。この活動時期を後でレポートの提出、発表会の活動について、大学入学後、成績評価を行い、単位を付与するというようになっております。

中嶋学長が遺されたもの：

国公立大学法人のガバナンスと「学生」のための大学づくり

理事長、学長というのは公立大学法人の場合は、理事長が学長を兼ねるのが法人法の基本にあります。分離するところもありますが、原則は理事長が学長を兼ねるということで、経営と教学と両方責任を持つということになります。開学当初から中嶋学長は、全国津々浦々いろいろな講演会で国際教養大学の実践例をしゃべっていただいたお蔭で、徐々に国際教養大学が浸透していったと思います。

中嶋学長が遺したもの

① “大学トップの強いリーダーシップ”

○ 理事長＝学長

アメリカの学長はしばしば、「野心的な目標を掲げ、新たな学術政策を展開し、新たな方向性に向けて機関を動かすための資源を分配し、より迅速かつ柔軟な決定をするために構造を変え、大学の役員の長としての知的なリーダーシップと、機関の職員の長としての運営のリーダーシップをともに提供することのできる、強力な執行者」として論じられる。

～ ロバート・バーンバウム「ガバナンスとマネジメント」(第31回研究員集会基調講演(広島大学)資料、2003年より引用)

上述のスライドは、ロバート・バーンバウム先生が広島大学での講演会において、アメリカの学長のリーダーシップのことを発表した資料からの引用です。これは、このまま中嶋学長に当てはまるのではないかと思います。つまり、野心的な目標を掲げて新たな方向性について機関を動かすためのいろいろな策を施して、大学の理事長として知的なリーダーシップを発揮しつつ、職員としての運営のリーダーシップを取る。要するに強力な執行者である。バーンバウム先生が言っているアメリカの学長のことが、そのまま中嶋学長に当てはまるのではないかということで紹介させていただきました。

中嶋学長が遺したもの

② “『学生』のための大学づくり”

- 常に“学生のために”が、口癖。
- 学生から慕われる学長であった。



く本学帰国留学生とともに
賞学フェア(＠モンベル)



2009年度大学祭
オープニング・セレモニー ▲

これは一つのエピソードです。学長はいろいろな講演の合間、学生のことを常に考えておりました。常に「学生のために」が口癖で、学生から慕われる学長でありました。大学祭のオープンセレモニーで、真ん中でロックンロールの格好をしているのが中嶋学長で、私が学生課長をした時に、実行委員会から学長にこういう格好をさせたいと言われて、私は「いいと思いますよ」と言って一緒に行ったら、学長が「絶対に嫌だ」と固辞していたのです。絶対ダメだと言って相当固辞して、けれども黙っていたら、この出で立ちでステージ

に上げられ、観衆から拍手喝采を浴びておられました。

先導的大学間による連携 (G4)

2010年4月には、国際的人材の育成をめざし、すでに先導的に多様な取り組みを実践してきた国際教養大学、国際基督教大学、立命館アジア太平洋大学、早稲田大学国際教養学部が共に協力し合い、より一層教育の質の向上などを推進することを目的として4大学連携協定(G4)が締結され、学生の交流、共同教育の実施、FD、SDなどの共同運用がはじまっています。最近、上智大学も参画されたようです。

「大学の国際化」とは何か

これまで、国際教養大学での取組についての話をさせていただきましたが、以後は「大学の国際化」とは何か。一般化させて、問題提起をさせていただきたいと思います。「大学の国際化」とは、海外との交流締結をすればいいのか、今流行りの英語のみによる学位が取れるコースを準備したらいいのか、外国人や海外での経験を有する教員を多く採用したらいいのか、それとも留学生をたくさん受け入れたら、大学の国際化になるのか？

大学の国際化

- 海外の大学との交流協定の締結？
- 英語による授業のみで学位が取得できるコース？
- 外国人や海外での経験を有する教員の採用？
- 留学生の受け入れ？
- 9月入学&ギャップターム？

↓

“国際通用性”を持った教育

はたまた、9月入学やギャップタームといったものをやったら本当の意味の国際化になるのだろうか？これはアンチテーゼです。要は大学の国際化と言いながら、世界通用性を持った教育をしななければ、いくら仕掛けを作っても、最後はここに辿り着くのはできないのではないかと、私は思っております。

グローバル人材の育成

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ

(「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」(2011年))

では、グローバル人材の育成というのは、最近政府やいろいろな団体でグローバル人材の定義があります。何点かここに挙げておきますので、読んでいただければよろしいかと思います。

グローバル人材育成推進会議がまとめたものには、語学力、コミュニケーション力、主体性、チャレンジ精神、強調性、柔軟性、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ。こういった要素を持った人をグローバル人材と述べています。これは文科省の補助金等々の説明でも使われているものだと思います。

文部科学省の施策

【グローバル30事業】

「留学生受入体制の整備をはじめとする大学の国際化に向けた取り組みを実施し、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材を要請することを目的とする「国際化拠点整備事業(大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業)」である。

- 「英語による授業等の実施体制の構築」
- 「留学生受入に関する体制の整備」
- 「戦略的な国際連携の推進」など

最近、文科省の施策を見てみると、グローバル30という、実際はグローバル13のようですが、留学生受け入れの体制、整備をはじめとして大学の国際化に向けた取り組みを実施して、留学生と切磋琢磨する環境の中で国際的に活躍できる高度な人材を養成することを目的とするということで、グローバル30と言いながら、13大学(東北大、筑波大、東京大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大、慶應大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大)しか選ばれておりません。これに共通する取組が英語による授業等々の実施体制の構築、留学生の受け入れに関する体制の整備、戦略的な国際連携の推進等々が掲げております。

なぜ国際教養大学が入っていないのか。また、国際基督教大学や立命館アジア太平洋大学といった早くから国際的人材の養成などの取り組みをしている大学が入っていません。どうしてでしょう？ 実際「大学の国際化」に実績のある国際教養大学などはこのような取り組みをやっている大学は対象外にしたそうです。今からやるところにお金を付けることも肝要かもしれないが、実績のある「大学の国際化」の取組に先導的な役割を果たす大学にも助成の対象とすることが筋だと思えます。

か？

【秋季入学について考える】

- 秋季入学が本当の国際標準(グローバル・スタンダード)といえるのか？
- 9月入学でなくとも国際的な大学はあるのではないのか？
- 9月入学でなくとも「グローバル人材の育成」は可能ではないか？
- 留学生の受け入れ増大が狙い？？
- それとも世界の大学ランキングを気にしているの？

本当に9月入学は必要なのか

もう1点は、最近東京大学の9月入学が話題になっております。衝撃的なことではでしょうか。大学の国際化のためには、本当に9月入学は必要なのでしょうかというのが、もう一つの観点からの投げ掛けです。

● 東京大学の秋季入学への移行の本音はどこにあるのか？

- ① 国際的な学生の流動性の向上
- ② 学事暦の見直しによる教育の効率化の向上
- ③ ギャップタームを活用した学習体験の豊富化
- ④ 社会へのインパクト(グローバル化の推進等)

↓
大学の教育力・研究力の向上
日本の国際競争力向上と社会の発展など

【東京大学HPより】

これは東京大学のホームページにも載っております。秋入学への移行ということで、四つの点を東京大学は挙げておりました。これらの四つのことを通じて、大学教育の教育力や研究力の向上を図る、日本の国際競争力と社会の発展。そのために秋入学をやる。本音は本当にここにあるのかというのが、私が疑ってかかるところです。

秋入学を考える時に、グローバル・スタンダード、欧米がやっているから9月にとということ、それで国際標準と言えるのか。9月入学でなくても国際的な大学はたくさんあるのではないか。9月入学でなくてもグローバル人材というのは、ちゃんとやれば育成できるのではないか。私のひねくれた考えですが...、結局は大学のランキングを気にし過ぎて、ランキングを上げるために、留学生の受け入れが狙いで、9月入学の導入を考えたの

もう一つ、ギャップターム。国際教養大学の場合はギャップイヤーと言っておりましたが、そういったことをなぜやるのか、大学で学ぶ目的意識の明確化や動機付け、偏差値重視の価値観のリセット、学ぶ意識への転換、入学後の海外留学への挑戦をする素地作り。こういったことが目的でこのシステムを導入するのか。

東大におけるギャップタームの導入の本当の意図はどこにあるのかというのが、私が日々感じているところです。やはりギャップタームを導入するということは、知的な冒険、挑戦をするとか、社会体験を通じて視野を広げるとか、大学での学びに向けた基礎力、リメディアルといったところもギャップタームでやると言っていますが、果たして高校を出てすぐの、入学する前の半年間の時期にやらなければいけないのか、別にギャップタームはイギリスでもそうですが、大学に入ってからやってもいいのではないかと個人的には思っております。

● 東京大学のギャップタームの導入の意図はどこにあるのか？

- ・ 大学で学ぶ目的意識を明確化、動機づけ
- ・ 偏差値重視の価値観のリセット、学ぶ姿勢への転換
- ・ 入学後の海外留学などへの挑戦する素地づくり

【東京大学HPより】

● **東京大の9月入学を批判的に考えると、**

1. 国際的な大学間競争を勝ち抜くための大学教育の国際化のための留学生の獲得か？

→ **これを解決するための手段としての「秋季入学」移行？ “9月入学”に移行すれば解決できる問題か？**

2. 秋季入学により、初等中等教育との半年間の溝を埋めるためにギャップタームを導入するつもりか。

東京大学の9月入学を批判的に見てみますと、やはり国際的な大学間競争を勝ち抜くための大学教育の国際化のために留学生の確保と言っておりますが、本当に秋入学に移行しても解決できる問題なのかと。本当は教育内容や、その着実な実践もきちんとやらないと、ただ入学時期をずらしただけで留学生が果たして確保できるのかということと、今、小学校、中学校は4月に始まって3月に終わると学校教育法に規定されてありますが、大学だけ秋入学にして、その半年間どのように、そのためにギャップタームをやるのは本末転倒ではないか、9月入学というものが果たして有効的なのかと、私は考えております。

まとめ

今回の私のお話のまとめをさせていただきます。一つは、すべての大学がグローバル化を主張することが本当に必要なのか。大学として何のためにグローバル化するのかというのが不明確ではないかと、私は個人的に思っております。

二つ目は、国際教養大学等々での大学マネジメントを通じて感じたことですが、それぞれの大学の建学理念を実現する中で、各大学のミッションやビジョンに合わせてどのような人材を育成していくのか、グローバル化をどのように位置付けるか、その議論をちゃんとしないと、世間が国際系の大学を作っているから、ただある学部学科だけ学生を集めるために目先だけを変えても、自分たちの大学を振り返ってそのようなミッションが建学理念の中にあるのかどうかということから議論して、ただ国際教養大学やいろいろなところで成功しているからということで学生を確保するのみに飛びついてやっても、なかなか大学のグローバル化、国際化、もしくはグローバル人材とい

うものは、その大学では育っていかないのではないかと、私が考えていることです。

行き着くところは、国際教養大学のように、大学の建学の理念、ミッションを掲げて、それを実現するためのいろいろな方策をちゃんとやって、はじめて社会が認知してくれるのではないかと思っております。

今さら文科省がグローバル 30 といっておりますが、時代を遡れば中曽根内閣の時に留学生 10 万人計画といつて、いろいろな政策をやって、最近では留学生 30 万人計画と称して、大学の国際化、グローバル 30 といつて、巨額の資金をずっとつぎ込んできたと思います。

これまで 20 年近く、東大をはじめ多くの大学に対して、大学の国際化と称して巨資を投入してきたが、果たしてその成果は？ 本当の意味での「大学の国際化」になった大学はあるのか？

巨資を投入しなくとも、明確なミッションの下、学長のリーダーシップによる施策の遂行による Good Practice として、中嶋先生が作った国際教養大学のような事例が身近にあることを忘れてないでいただきたい。

まとめ

1. すべての大学がグローバル化する必要はない。

→ **大学として何のためにグローバル化するか不明確**

2. それぞれの大学の「建学の理念」を実現するなかで、各大学のミッション・ビジョンに合わせて、どのような人材を育成していくのか、グローバル化をどの位置づけていくのかについて、議論をきちんとすべきである。

本稿は、平成 25 年 3 月 13 日に、「都市圏高等教育懇談会」で吉崎誠氏が講演された内容を整理したものです。